



説教要旨「どん底のクリスマス」

ルカによる福音書 1章39～56節

数年前に、あるNPO法人が調査したところによると、シングルマザーの3人に1人が「クリスマスなんて無ければいいのに」と考えたことがあると公表され、話題になったことがありました。また、同じNPO法人が先週発表した『コロナ禍における、子どもの体験についての調査』の中で、困窮する子育て世代の家庭では、昨年のクリスマスに子どもへのクリスマスプレゼントをあげた割合が44.6%だったことが明らかになりました。つまり、経済的に困窮している家庭の半数以上の子どもたちのところには、サンタクロースがやってきていないのです。クリスマスには、クリスマスケーキを食べて、サンタクロースからプレゼントをもらおうといった当たり前のような景色が、まったく当たり前ではない家庭がたくさんあるのです。

けれどもクリスマスというのは本来、そのように余裕がなく、「自分にはクリスマスなんて関係ない」、「クリスマスなんて無ければいいのに」と思っている人にこそ、伝えられる喜びの知らせだったはずなのです。

結婚する前に身ごもったマリアは、おそらく周囲の誰からも後ろ指を指されたことでしょう。誰にも喜んでもらえない妊娠です。わたしたちだって身近な誰かが、父親はいないけれど妊娠したなんて聞いたら、眉をひそめたり、あるいはその女性を支えようと思ったとしても、きっと手放して「おめでとう」と祝福できないのではないのでしょうか。マリアも、家族や周囲の人たちに、心配されたり、あるいは軽蔑されたりしたはずです。けれども、マリアと同じように、天使に告げられて身ごもったこのエリサベトだけは、マリアの妊娠を無条件に祝福するのです。彼女の言葉に、マリアはどれだけ勇気づけられたことでしょうか。

神さまは、どん底にある人にこそ目に留めて、偉大なわざを行われるのだとマリアは歌い上げています。わたしたちも、現代のマリアとも呼ぶべき人々に、少しでも寄り添うものとなれますように、祈りをあわせてまいりましょう。

(2021・12・19 説教者：稲垣真実)